

《座談会》

母校と卒業生

出席者——(ABC順)

久保 誠 三(本部長、室付)
前同志社中学校長

小西 宏(光世証券株式会社、専務)
取締役、昭和三十六年大
学経済学部卒業

中村 友 一(有限会社御影貿易商事、)
取締役社長、昭和三十年
大学経済学部卒業

吉本 晴 彦(大阪マルビル・オーナー)
取締役社長、昭和二十一年
旧制大学経済学科卒業

司会——

浅 香 正(大学文学部教授)

一、それぞれの学生時代

浅香 きょうはほんとにお忙しいところ、
ようこそおいでいただきましてありがとうございます。
ございました。

ふだんは本部とか校友会でいろいろご活躍
を賜っております、同志社のことについては
豊富な知識と経験をもっていらっしゃる方
々でございますので、遠慮なくお話を承りた
いと思います。まず最初に、卒業生の方々は
母校に何を期待するか、あるいは大学が卒業
生の方々にどういう期待をもっているかとい
う話をさしていただきたいのですが、その前
にちょっと先生方の学生時代を回顧していた
だきたいと思います。順番からいいますと吉
本さんが一番ご年輩だと思えます。

吉本 ぼくは大阪府立の豊申中学に行っ
てまして、ちよつと家庭の事情があつて五年に
行くのはいやだから、四年から入るところは
ないかと思つて自分で探したら、同志社の予
科の二部は四年から探ったんですね。だから
同志社に入ったので、ぼくは別に同志社が好
きで入つたわけでもないし、新島先生を尊敬
して入つたわけでもないし、キリスト教がい

いと思つて入つたわけでもない。四年から入るところはどこかといつたら、関西ではここだったのです。しかも著名度も高いしというので入つたんですけども、ぼくは入つてよかったと思う。中学校の五年なんて行つても行かんでも同じこととして、この予科の一年のほろがずいぶん社会勉強にもなつたし、その予科を三年間やつて、大学は二年で昭和十八年十二月に学徒出陣で兵役にとられましたので、終戦で主計少尉になつて帰つてきて、昭和二十一年九月に異例の九月卒業という、そういう同志社の学生生活を送つてきましたので、軍隊生活も入つてましてちょっと変わったパターンですが、同志社は非常に自由だったと思つたですね。私自身も京都の下宿生活というか、そういうことをしてみたいと思つて、京都の百万遍の京都アパートにいます、京大の学生とか立命館の学生とか、そんな連中とも友達になりましたし、学校の成績は中の上ぐらいでしたけれども、社会勉強の点ではたいへんプラスになりました。

浅香 吉本さんは予科へお入りになりましたのは昭和十三年だと思つますが、そのころの予科の雰囲気はどうでしたか。

吉本 非常に自由でしてね。ただ軍国主義が台頭してましたから教練が必修科目で、六十点取らないと見習士官になれないのですね。六十点取るために必死になつて教練に出まして、遅れたらいかんから、学生会館できつねどんぶりを二分で食つて、パツと走つて行つてサツと並んだ記憶がありますが、教官もそんな軍閥というよう方なじゃありませんし、ほんとに自由で楽しかつたですね。

浅香 クラスはどうでしたか。固定制ですか。

吉本 私のときはこの有終館で、予科の一部は二組しかありませんでした。二部は五組ぐらいありましたかね。ですから一部というのとはとくにのんびりしてました。

浅香 吉本さんは戦前の同志社の予科時代をご存じなんです、その次は久保先生ですね。

久保 私は同志社ではないんです。同志社にお世話になつたのは昭和十九年九月からなんですけれども、同志社ではないのです。

浅香 中村さんは中学校からですね。

中村 昭和二十年、終戦の年に中学校に入りました。うちの身内に同志社の者が多かつ

たものですから、同志社へ行こうと思つたのですが、戦争中ですから試験問題は、サイパン島からB 29が飛んでくるのに、何時何分に出て何キロで飛んでくる、何時に東京に着くかとか、おそらく京都全部、一中も同志社も府もみんないっしょの問題やつたような記憶がありますけどね。それで同志社に入りましたけれども、いまの吉本さんの話じゃないけれども、とくに同志社に抱負をもつて入つてきたというふうなことではなかつた。

中学を終わりました高校になりますと、新制への改革で岩倉に移りまして、ここ今出川からガタガタの机をいっぱいトラックに積んで運びましたけれども、岩倉の三年間は校長山田貞夫先生を中心とする新進気鋭の先生がたくさんいらつしやいまして、そこでぼくは同志社精神というものを強烈に体得したという思いがするわけです。

そして高校を出まして同志社大学の経済学部に入ったわけですが、私の大学の四年間は経済学部にながら英語ばかりやつておつたという感じでありまして、同志社に入つた以上は卒業するまでに英語を自分のものにしたという希望から、上野直蔵先生はじめ柳島



中村 友一氏

彦作先生とかいった方々に教えられながら、同志社の英語というものを勉強させてもらった。これはほくにとつて何物にもかえがたい宝物である。おかげさまで、それで私はいま英語を使って貿易の仕事をしているわけですから、そういう意味で同志社には非常に恩があるわけです。今、本職以外に、ある大学で若い学生諸君に英語を教えています。同志社から受けたものを、次の世代の人達に還元しようという気持ちからです。

浅香 中村さんは卒業なさってかれこれ二十年ほどたつたのじゃないかと思うのですが、何がいはん自分を同志社と結びつけているのか。それは精神的なものか、あるいは学生時代のクラブ活動であるとか、あるいはまたゼミであるとか、いろいろな核があると思

ますが。

中村 私は英語とキリスト教でしょうか。ほくは古い料理屋のせがれですから、およそキリスト教には何の縁もなかったわけですが、それでも、それが同志社に入りまして京都教会に属するようになりまして、そこでキリスト教というものに触れたわけですね。それが一つ、ほくが同志社で発見した、ほかのものに比べられないぐらいの大きな人生の転機になりましたね。それとわたしの英語というものは、これは同志社のESSの活動ですけれども、そういったものを通してほくは同志社とつながってきたと考えていますけれども。

浅香 その次は小西さんですね。小西さんはもう少しあとだと思うのですけれども、私の記憶では大学から同志社へお見えになったと思うのですが。

小西 ほくは三十六年の卒業ですので、同志社へ来ましたのは三十二年なんです。兄貴も姉も二人とも同志社中学から行っています。そんな関係で同志社とは非常に親密感があると申しますか、大学四年間しか行ってませんが、そのわりには同志社のことについては案外知っているほうではないかと思いま

す。兄なんかが高校時代か中学時代に早天折禱会に、若王子へ朝早くから出て行ったりするのを聞いたり見たりしておりますし、そういうようなことで親密感もあったし、またラグビー部に籍を置いていたものですから、そんな関係で同志社へ来ました。

やはり同志社のよきは、自由奔放であるということとか、よき友、いい先輩、いい先生にめぐり会えたというふうなことで、同志社へ来てよかったと思っております。

浅香 久保先生は学生時代、よそから同志社をごらんになって、どういう大学だと思っておられましたか。

久保 遠く関東からですから、身近にはないのですが、自由な温かい雰囲気とのびのびとしたところがある大学だと思っていた。しかし、来てみると大学生は徴兵猶予が切れて、ほとんどが軍隊にいらした時代ですのでね。私が来た当時は中学生以下、しかも中学も高学年はほとんど工場などへ動員させられて、一、二年生だけがこちらに残っていたという異常状態でしたから、同志社の雰囲気というものは、残ってられた教職員のみでつくります、温かい雰囲気を感じたというこ

とであつたかと思ひます。衣食、特に食糧は極度に窮乏し、連日の空襲で明日の命もわからなかつたあの追いつめられた時代に、温かさの残つていた同志社は、今にして思えば素晴らしい存在だつたと思ひます。

浅香 いま皆さんからお伺いしましたが、ある意味でそれぞれ違つた年代をご卒業されたわけですが、私も実は昭和十八年に同志社の予科へ入つたわけでございます。そのころは戦争中でございますけれども、やはりクラスはちゃんと固定されておりますし、どの先生もクラスへ来て授業していただく。こちらから移動して授業を受けるということとは少なかつた。そのためクラスメートは非常に親密であつたような気がします。それから先生方も、毎時間出席をとられますか



小西 宏氏

らほとんど全部学生の名前を覚えていらつしやるわけですね。学生としては、まず名前を覚えてもらう、そして会つたときに名前を呼んでもらうことが、先生方と親密になる第一歩じゃなかつたかと思うのです。だから対抗試合をやるときには各クラスが集まって激励会をやるとか、あるいは何か行事があるときぐこの有終館の前へ集まってきて壮行会のようなものを作って、そのときは予科長先生はじめ全員がお見えになる。そういう意味で学校の先生方と予科なら予科の学生全部との間に一体感があつたような気がするわけですね。それは中村さんだったら、高等学校のときがそうじゃなかつたかと思うわけです。

二、同志社教育に求めるもの

浅香 戦後学生数が多くなつてまいりますと、学生と大学の結びつきが少しかつたが少し変わつてきたのじゃないかなという気がしません。先生方は学生の名前を覚えることもありませんし、またできつてもないわけで、そ

う意味で戦前の同志社と卒業生の関係と、戦後の同志社と卒業生の関係も変化してきていふような気がするわけですが、そういう大衆化された大学の現状のなかで、現在皆さん方は自分の母校に対してどういうことを期待しておられるかをお聞きしたいのですけれども、まず吉本さんから……。

吉本 私は同志社に入って物理的にクラスになつたのは、自動車部に入りましたおかげで満十八のときに自動車の免許状を取つたわけです。そのおかげで兵役も金岡の輜重兵連隊の自動車部隊に入りましていふん樂をして、それから甲種幹部候補生になつて主計少尉になつたんですけれど、学校で自動車だけ覚えてたということで、それ以外には率直に言うて私は学校に何もかかわりをもつ感情はなかつたのです。

たまたま、ひよんなことから大学の卒業生の校友会にいつのまにか関与するようになって、いま同志社の監事をしたり、評議員をしたり、校友会の副会長とか大阪支部長なんかやつて、同志社とかかわり合ひをもつてますが、率直に言つて同志社というのは、新島先生は偉かつたかもしれない、言動はりつぱで



吉本 晴彦氏

あつたし、徒手空拳のなかで同志社をつくられた新島先生は偉いと思いますけど、それは校祖という偶像化のなかで理解をしているだけで、私は同志社というのは、自分の学生生活なんか見てみて非常に個人主義やと思うのですね。自分のことは自分でやる、人には迷惑をかけないという、いい意味のアメリカ式の個人主義で、けっしてファミリー・スクールではないと思うのです。

私は卒業してからも、予科も大学も同窓会はありませんし、先生との交流もないし、もちろんゼミもありませんでしたから、人的関係というのは全然ないですね。同志社は、すべて非常にクールですね。今でもですが、昔からそうでした。クラス割であつた浅香先生のときはファミリーであつたけれども、私の

ときはクールな学校でしたから、基本としては同志社はクールですね。大学と生徒はクラスでつながっている、あるいは同窓とか校友とかいう形で学校とかかわりをもっているということ以外は、ファミリーの温かさを感じさせない。それが同志社の特色だと思うのですね。

たとえば、最近なんですけれども、名前を言っちゃいけませんから、A教授ということにします。その方はたまたま同志社の卒業生なんですけれども、そのおやじも同志社を出ているのですが、同志社じゃなしに友人という関係で結婚式の披露宴によべれたんです。メインテーブルでほくにスピーチをしろうというんだが、二人おいてむこうにA教授がおるわけですよ。それはほくよりずっと後輩なんです、ほくは先輩で監事をしているし、いろんなことしているのを知っているわけですね。それでもひと言もものを言いませんね。私も先輩だし、こつちも言わない。やはり同志社は個人主義の学校ではないかなということをしていまだに感じているし、ほくはファミリーになつてほしいと思うけれども、基本的にいい意味のアメリカ的な個人主義のなかで、お互

いに理解し合いながら成長してきたのじゃないかと思えますね。

浅香 中村さんどうですか。卒業なさつて、いろいろ同志社の卒業生にも接触なさつたと思いますが、もしも期待するとすれば、同志社はとくに校友に対してこういうふうによつてもらつたほうがいいんじゃないかというご希望みたいなものがありましたら……。

中村 ちょっとたてまえ論みたいになりまして、同志社の教育として希望することには、同志社はほかの学校とは違う特殊性がある。もちろん私学はそれぞれ立学の精神があるわけですが、最近若い学生と話をしても、吉本さんの言われるようないい意味での個人主義ならいいのですけれども、利己的といいますか、自分だけの道をゆくという感じで、学校は別に入つてしまえばどこでもいい。ほかの大学に行つていようと同志社に行つていようと、本人にとっては大した差はないというふうな学生諸君が増えてくる傾向があるのじゃなからうかと思うのです。

そういう意味で、同志社は鎖国の時代に新島襄というあれだけの大きなアドヴェンチャーをして、アメリカへ渡つて、帰国後もあらゆ



久保 誠三氏

るこの的的な名譽も拒んで一つの学校をつくらせた。その勇氣と大きなヴィジョンに基づいてできていたわけですから、同志社でしかありえない教育を全部の学生が享受できる体制というものが、いちばん望ましいと思うのです。それがぼくらの時代には、大学に入ってから吉本さんの言われるように、アメリカ的なよい意味での個人主義を感じました。しかし岩倉の高等学校にいたときはファミリー的な、先生方との接触も深かったし、自分も精いっぱい思う存分青春を楽しめたといえますか、發揮できたような時代がありましたから、家族的な同志社の雰囲気があったと思います。

浅香 小西さんは、あなたの学生のころと、今の同志社の学生との違いというものを

お感じになりますか。同志社の卒業生もいろいろ採用なさっていると思うのですけれども、学生のかたぎとか性格とかごらんになつてどうですか。

小西 最近の学生は、学力の点では優秀になつてきている部分がかなりあると思います。そのかわり、先ほどからもお話に出てくるように、どうしても同志社へ行きたかったというふうなのはあまりないですね。ここなら入れるから入ってきた、大学ならどこでもいいという感じで、それがたまたま同志社だったというのが多いように思います。その点、昔の人というか、われわれのときには同志社というものにあこがれて、また卒業したことにそれだけの誇りももっていたわけですから、現在の試験というものがミニ東大化しているというか、学力だけで選んでいるために、レヴェルはアップしているけれども、せっかく校祖の新島先生が知・徳・体というところで、校章にもあるごとく三つのバランスを説いておられるのに、われわれの時代は逆に知力よりも体力のほうが大きいような校章になったり、今の連中は知育のほうが大きいかもしれないけれど、徳育とか体育の面

でアンバランスというふうな、本来の校章的なバランスのとれた人間が若干少ないのじゃないかという感じはありますね。

それと意外に、卒業してからも大学に対する愛着というものはないのですね。高校なんかのほうが同窓会などでも行こうという気になるらしいですけれども、大学は東京で年一回あるわけですが、なかなか集まりが悪い。とくに新しい卒業生が少ないですね。四十をこえたあたりの人から集まりが多いということとで……。

浅香 久保先生はいかがですか。

久保 卒業生の方々が何を望まれるかというときに、いちばん先に出るのは、新島先生の立学の精神が生きているよい大学というか、創立者の理想とされた教育が漲ぎっているりっぱな大学にしてほしいという願いではないかと思つていたのですよ。ところがこのご意見はあまりないようすですね。けれども、同志社は立学の精神として、りっぱなものをもっているわけですから、この精神を生かしたりっぱな大学をつくるように努力してほしいということがあつても良いのではないかと、思いますね。そのために第一に新島先生が、



浅香 正氏

教育の基本におかれた精神教育の充実が必要なのではないか、同志社は大きくなるにつれて、精神教育の面は弱まってきているように思うので、新島先生の願われた、一国の良心となり、社会・国家の安寧・幸福のために働く人々を養成するために、精神教育の強化が大切なのではないか。そして、どの国からも信頼され、親しまれ、尊敬される国として、世界に平和をつくる力となる、一国の良心としてあらゆる分野で活躍する同志社人を養成してほしい。そのためには同志社は世界的に優れた先生方をお招きすべきであるし、教育施設の充実も計ってほしい。田辺の問題などもこの一環であると思うから世界的な大学になるために頑張ってほしい、というように叱咤激励があってもよいのではないかと思う

のですが。

浅香 先ほどもご指摘がありましたように、中学校・高等学校を含めて以前の同志社大学には個性というものが強かったのじゃないかという気がするのです。ところが戦後大衆社会になってきて、高等教育も大衆化してきますとだんだん個性がなくなってきた、東大を頂点にしたピラミッドの中にはめこまれてしまつて、ほんとは東大や京大に入りたかったのだけれども、やむをえず同志社に來たという学生がいるわけですね。

そういう学生を見てみると、失敗をする四年間同志社というものに對する帰属意識がないままに卒業していつてしまふ。そういう学生は学習意欲もないし、クラブ活動を一生懸命やるかというところでもないし、同志社大学の学生という自覚がないままに卒業してしまふ。そういう点で、最近私立大学の間でも、私立大学は国公立の大学と違ふし、建学の精神とか大学の個性があるわけですから、それを学生に訴えて、あの人は個性のある同志社の卒業生だといわれるようなりつばな、卒業生をつくりたいということで、いろいろ改革している面もあるわけですね。

たとえば新制大学の発足とともに一般教育というものがありまして、これは学生にとってはなにか魅力のない、お荷物みたいな、早く一般教育を終えて専門の授業を取りたいという学生が多かつたのじゃないかと思ひます。そういうことで十数年前一般教育を改革いたしましたして、総合科目という科目をつくり、その中で三つの柱を立てて、一つは建学の精神にかかわるもの——必ずしも手前みそをやるといふことじゃなくして、同志社は新島先生がつくつたわけですし、新島先生の精神が現代のなかでどういうように生かされていったらいいのかということを中心にして、「日本の近代化とキリスト教」「日本の近代化と新島襄」というような題目で講義が行われるようになりました。その科目は学生に非常に魅力があつたように聞いております。これで初めて同志社というのは何かということがわかつたという学生が出てまいりました。

二番目は、たとえば日本史の例をとつてみますと、北海道でも東京でも、京都でも広島でも九州でもみんな同じ日本史の講義をしている。これはおかしいじゃないか。同志社は文化財の多い京都にあるわけですから、もつ

と地域について勉強しようじゃないかということ、**「京都の自然と文化」**という題目で講義を始めたわけです。これも学生に魅力がありまして、登録者は一時七百人ぐらいいったことがあります。

それからもう一つ、大学は旧制大学のように高度の専門教育ではなく、むしろ幅の広い教養をもった人間を教育する、あるいは養成するといったことが強くなってきたわけですから、現代の日本の社会・政治・経済・文化というものがどういう状況に置かれているのか、現代の日本が抱えている問題は何か、についての認識をもたせる意味で、「公害」などの講義をしようじゃないかということになりました。「公害」では最初はいろいろトラブルもあつたんですけども、しかし学生に訴える要素は非常に強く、大学も個性のある教育をしようと努力してきていることは事実だと思います。それにもかかわらず、卒業してゆく学生諸君と大学との間のつながりがだんだん薄くなってきているのではないかといい批判を、受けているわけです。その点についていかがでしょうか。

三、大学と卒業生の絆

吉本 ぼくはいま六十一歳ですけども、ご先祖のおかげでマルビルを建て、本を十三冊書き、講演をしたり、テレビやラジオでしゃべったり、雑誌に出たりしているから普通の人は知っているのですね。そうすると、吉本さんなら私は同志社ですと言ってもだいじょうぶだろうと。だから、私は同志社をいつどこの何科を出たといいます。実は中村さんが世話した兵庫支部のクリスマス・パーティーのとき、私は名刺三十枚持っていたのを全部交換したんですけども、言うならば、この人ならだいじょうぶだという一つのステイタスというか、お礼を持っておるからみな安心してものを言うのですね。これがうっかり私は同志社ですと言うたら、金くれと言われへんかとか、寄付くれと言われへんかとか、何かものを頼まれへんか、これ買ってくれとか売ってくれとか、就職を頼むとか、同志社というところは何か頼むと、そう思っている人が多い。

久保さんの言われたのはむろん正論ですよ。私たちのときの受験合格率は公称八倍と言

ってました。実際はおそらく四倍でしょう。

そういうときの学生と、今のように受験者が多くて、同志社大学の学生も京都大学と相並ぶぐらいの学力があり、非常にステイタスが上がつていると思うのです。昔のこと知っているから、今の学校はずいぶんよくなったなと思います。自分の出た学校に誇りをもたんやつはよほどどうかしていると思いますけれども、同志社がよくなってくれればよくなるほど、それだけ自分自身の経歴がよくなるわけですから、そういう意味では期待しますけれども、別に期待をせんでも、これからはほとんどの人間が大学を出る。これからまたちょっと人口が減れば少なくなるかもわかりませんが、だいたい関関同立そのもののステイタスが上がつてきて、東京の早稲田と関西の同志社、だいたい性格は違いますけれども、そういう形で上がつてきたことはいへんありがたいと思っておりますよ。私は学校の世話をし、学校の経営なり、教授陣なり、学生の質なり見えますから、私たちのときは雲泥の差があるわけです。そういう学生諸君にいい教授、いい先生が教えていただいで、自分が思っている以上に同志社はりっば

になった、そういうふうに私は満足して居るのですけどね。

ただ卒業生がよくないと、学力だけでは同社社のステイタスは上がらんということですね。故上野直蔵総長が「同社社に栄光はなかった」と木枝学長におっしゃったというが、私もなかったと思いますね。同社社の栄光というのは、田辺校地のできる百十一年あたりから始まってくるし、一段とステイタスが上がってくる。名実ともに誇りうる同社社になる。

その間の過程で、新島先生が徒手空拳でつくられた学校と、福沢さんのように政治家にバックされたり、大隈さんのように政治家にバックされてきた学校と一概に論ずるのはおかしいと思うのです。言うならば財政的基盤の乏しかった学校としては、実によく成長したなど、そういう意味ではほくは今の学生なり教授陣に心から敬意を表したいと思います。しかし私の周辺を見渡すと慶応とか早稲田と比較して、いささか社会的評価においては劣るのじゃないか、という不安があります。今後の同社社人を育ててくれるのは、最近出て行った学生や、これからの栄光ある同社社の

学生ではないかと、そういうことに私は期待をしたいと思っているのです。

浅香 非常に温かいおこたをいただいたのですが、私もよく卒業生の方から、大学は卒業したんだけれども、訪ねてこられるのは寄付募金のときぐらいで、それ以外は手紙一本ももらったこともない。通信と申しますか、大学の近況を知らすような連絡もほとんど受けたこともない。慶応なんかその点非常にきめ細かくやっている、というご批判を受けているのですが、中村さんいかが思われますか。

中村 私らは校友会活動を通じて同社社とつながっているわけですけれども、一つの例として、校友会の支部の総会をやるということでも数千人の会員に案内状を出しますね。三分の一ぐらいは転居先不明で帰ってくるわけですよ。四年に一回校友会名簿を発行してありますけれども、どうしてもその四年の間に変わってしまうわけです。転居先不明というのがかなり増えてくるわけです。どこへ行かれたかわからない。そういう人たちが、学校は何もしてくれへん、校友会は何もしてくれへんとおっしゃる方がいるのですね。し

かし十八万五千人の校友全部を学校あるいは校友会本部からトレースしていくというのは不可能に近いわけです。J・F・ケネディーのことばじゃないけれども、学校が自分に何をしてくれるかということよりも、自分が学校に対して何ができるか。たとえば自分が転居しましたというはがき一枚出してくれれば、学校でも校友会でもその人がどこにいるかということはわかるわけです。求める姿勢だけでなく、自分のほうでできることはする。積極的に自分のほうから母校とコンタクトを保っていくというふうな、ごく小さな努力でいいわけです。それを卒業生自体がもつべきだと思いますね。

私自身のことをいえば、昭和三十年に学校を卒業しましてから東京に十五年おりました、その間に東京支部の活動をし、それから神戸に参りまして神戸支部、それがいま兵庫支部になりました、そういったものを通じて活動しておりますけれども、若い卒業生の人たちを最近見ますと、若い人たちは学校時代に学校との接触度が薄く学校の中にいながら同社社の教育というものを自分から積極的に受けようというような姿勢でない人たちが多

くなってきたと思うんですね。さっき言いましたように、別同志社でもよかったですし、ほかの学校でもよかったですという考え方が多いわけですから、そういう人たちが卒業してコンタクトを自分のほうから積極的にもとうとか、ひいては母校愛をもつといううなことは期待薄になってくるのですよね。そういう意味で卒業生自身の自覚といいますか、母校に対する再認識というものが必要ではなからうかと思えますけどね。

浅香 卒業生個々の人に会うと、卒業して年がゆくに応じて母校に対する郷愁が強くなってくる。これは人間の本性みたいなものがあるわけですけども、そういう母校に対する郷愁あるいは帰属意識、ある場合には母校愛というようなもの、それを具体的にどういうぐあいにして結集すれば、大学もよくなるし、校友卒業生もよくなっていただけるか。その組織の問題が戦前と戦後では変わってきているのじゃないかという気がするんですね。戦前は学生数も少ないですから、先ほど申しましたように校長は学生の名前もみんな覚えておられる。現在同志社大学は約二万近くの学生がいるわけで、毎年四千余の学生が卒

業していくわけですね。それを全部大学自身で掌握するということはむずかしくなっているのではないか。また学生も、大学とのコミュニケーションはないわけですね。あるとすれば各学部におけるゼミ、あるいはクラブ活動、そして卒業するごころは企業における卒業生のクラブを通じて学校と結びついてくる。それから最近では校友会の幹部の方たちのご努力によって、都道府県の校友会の組織が非常に強化されてきたと思います。そうすると都道府県単位に同志社卒業生の核ができってくる。そういうものを通じて同志社と結びつけてくるという気がするのです。同志社がよくするためには、一つは優れた研究をして日本の学問の発展に貢献をしているということが認識されること、二番目には、いい教育をして社会の信頼にこたえられるりっぱな卒業生を送り出す。さらに、卒業生の皆さんがそれぞれの職場でがんばっていただいで社会のリーダーになっていくことによって、ああいうりっぱな卒業生が出た学校ならいいじゃないかということ、社会活動を通じて卒業生の方が同志社の評価を高めていただく。このようにして大学と卒業生とが一体になった

ときに、初めて同志社全体がよくなっているのではないかという気がするわけです。

そういう意味で校友会の方々が、母校との結びつきを強化するにはこのようにしたならばもっと効果があるのではないか、というご意見なり、あるいは現在やっていらっしゃることをご披露願えたらありがたいと思います。

吉本 ファミリー・カンパニーということですが会社にもありますが、学校ならばファミリー・スクールとでもいいいますか、たとえば私の息子は二人とも甲南に入れて同志社にはお世話になってません。甲南になぜ入れたかといったら、ファミリーだから入れたんです。幼稚園から小学校へ行って、中学校へ行って、高校へ行って、大学へ行く、昔は旧制高校から京大にも入ったんですね。私は二人の息子を甲南へ入れてよかったなと思う。非常にファミリーで、スモール・スクールだから人脈がいいのですよ。甲南大学の卒業生はお互いに親子の縦の関係、そして横の友達の間係で非常に大きなヒューマン・リレーションズをもっているんですね。二人の息子も友人が多いです。大阪のJICのメンバーでも甲

南大学は六百人のうちでトップを占めている。それほど結束力があり、人脈がある。同志社がファミリー・スクールというならば、卒業生の子供を大学・高校・中学で採ってくるかといったら必ずしもそうではない。そこに卒業生は一種の疎外感をもちますね。

卒業生として同志社を見た場合に、やれ八十周年や九十周年や百周年やと、何かいうたら寄付を言うてくる。かってなときだけ言うてきて、ちょっともうこときいてくれないで、学校自体も卒業生にはたしてほんとに協力を要請しておるのかということ、はくはいまだに法人の監事をしながら感じるので。卒業生と口では言うけども、リユニオンなんかやったら、十八万五千人おってあれだけしか集まらんのかと。兵庫支部のクリスマス・パーティーのほうがなおrippぱであつたという意味で、同志社というのはそういう地域とか人脈とか、あるいはいままでの積み重ねによって力を発揮するのであって、同志社と校友とを結びつけるとかいう努力はいまさらしても効果ないと思うのですよ。むしろ同窓とか校友とか、あるいは先生のおっしゃった職場、それから先輩・後輩とか、ビジネ

ス間のやりとりとかというなかで同志社の連中が結束したときに、初めて慶応や早稲田のような形のクラブというのができてくるのじゃないか。ほんとの同志社クラブなんてないですよ。慶応は帝国ホテルの地下一階に慶応クラブをもってますね。

むりやりに校友と同志社を結びつけるよりも、それよりも私は、いい学生を送っていたことがわれわれ卒業生にはいぢばうられないことなんです。

四、一貫教育

浅香 久保先生は中学校の校長先生をしておられて、一貫教育ということに関してはこの経験が深いと思いますので、ひとつご意見を承りたいのですが。

久保 同志社では中学校から大学まで一貫教育が行なわれているということになっていて、進学には推薦制度という優れた制度があるわけですが、これは若い大切なエネルギーを受験技術の習得のために浪費することなく、巾広くそれぞれことなつた才能を磨き、個性を伸ばして豊かな徳性を養うのには本当に良い制度だと思えます。他人を押しつけて

進学していく必要がないわけですから、キリスト教的隣人愛だとか、相互協力や奉仕の精神を養うのには良い効果をもたらししていると思えます。自治・自立の精神などもこのような状態の中に育てられるのではないかと思えます。そして推薦進学者が大学でも中心的な良い学生として相応に良い効果をあげているともきくのですね。今まで人類が経験したことのない核の脅威の前には創立者の念願された、良心の充満した多くの人々が必要だと思えますが、このような人々の教育には中学から大学までの十年間の一貫教育がさらに充実されていくことが必要だと思えます。中高生の年代は心身共に大きく伸びるときですから教育の作用も大きいように思うからです。そして、中村さんがおっしゃった同志社への感謝もこの十年間一貫教育に基因しているものようですから、一貫教育は校友と母校とのつながりを強めていくものとなるように思うのです。けれども同志社の一貫教育にはいくつかの問題があるように思います。そのひとつは独立採算制に原因するものだと思います。独立採算制は各学校をばらばらにしているように思うのです。その結果は教育の一貫

性を欠くだけでなく、一貫教育の根幹である推薦制度さえもくずしていくのでないかと心配します。一貫性の弱いはらばら教育は学生生徒に迷惑をかけることになっていっていると思います。そのこともあってか、推薦進学者には無気力になって能力を十分に伸ばせない者が相当にいるのではないかと思います。こうなると推薦者を受け入れる側としては、なぜこのような生徒を受け入れなければならないのか、試験をすることも考えなければならぬのではないかと意見が出るのも当然なことではないかと思えますね。このことが推薦制度をくずしかねないと思えます。ですから、

教育上大切にしたい推薦制度を守るために、教育の自身について全同志社がひとつになつて考えていかななくてはいけないと思うのです。もうひとつ無気力な生徒をつくる原因となっているものに入試制度があると思えます。大学では学外からの推薦入学制度もたくさんと充実させているとききますが、良い傾向だと思えますね。入学後の成績とあまり相関関係が大きいといわれている筆答試問を絶対視している現在の入試制度は考えなおさないと、入学してから無気力になる生徒が

跡を絶たないことになるのではないかと思います。無気力で自分から成長を止めてしまう生徒は入試制度や教育方法の欠陥によるものじゃないかと思うのですが。

五、校友会活動および大学に対する期待

中村 吉本さんのおっしゃっているのは、卒業生と母校とのつながりを深める一つの例として出されたとおっしゃいましたが、それはもちろんそれとしていいじなことですけれども、もう一つ校友会活動があります。これはいま日本じゅうに六十八の支部があるわけで、だいたい県単位でできておりますけれども、その支部の総会といえますか集まりを、必ず毎年一回各支部で行うということになっております。私もかつてその支部強化委員長をしておりますときに各支部を回りましたけれども、行きますと、やはりそれを通じて母校とのつながりを求めてくる人はかなりおられるわけです。

校友会としても来年のリユニオンまでに新島会館の建築を完成し、十一月のリユニオンのときにそのテープカットをすることになつ

ています。新しくできる校友会館といえますか新島会館は、いままでは不都合な会館だったわけです。お建てになったときは斬新なものであったけれども、五十年もたったわけですから、そこでそれができ上がりますと、それをまた一つの接触の場として利用してもらえらるだろうと思えます。

昭和四十五、六年ごろは、校友会の財政は基金はなかったんですね。ゼロだったと聞いております。

吉本 そうです。ゼロです。異会長になつてから会長はじめ幹部の非常な努力で資金が蓄積されたんです。

中村 それをやつとそういう蓄積で、自己資金で建てることのできるようになったということですが、校友一般の方もそういうことを認識されて大いにこれから利用して、それを一つの学校とのつながりの場所にしてもらいたいと思えます。

久保 学校と校友とのつながりについてなんですけれども、同志社教育は、校友がその教育をもって社会に貢献してくださるところに意味があるのですから、校友に対して学校のほうからもっと温かく接触すべきですね。

卒業したら学校はもう知らないというようなことでもなしに、密接な関係を保っていく必要があるんじゃないかと思ってるのですよね。そして先輩の校友の方々は、後輩を育てて下さっているのですから、学校と校友は一体となって同志社教育を完成させるのだという考えを持たなければ、と思うのですね。ですから学内に校友に対する連絡あるのは、協力しやすい組織をつくって、同志社教育の成果を世に示して下さっている校友に協力する位いのことをするならば、校友と学校の間がりはもっと温かいものになっていくと思います。だから、校友部でもつくって、このような仕事に取り組んでもらったらと思うんです。

小西 いま久保先生がおっしゃってましたように校友部というか、そういうようなことでけっこうなんですけれども、卒業生がいろんな面で活躍してレヴェルアップする。そして卒業生が優秀なのが出れば学生のいいのも集まってくるということで、いい循環になってくると思うのです。

ぼくは現在東京にいるわけですからけれども、東京でも上場企業なんかで同志社人が役員に

入ってくるとか部長になってくるということ、活躍がものすごく出てきているわけですね。たとえば日興証券で役員になったときなんか、慶応では塾長から——もちろん印刷物ですけれども、サインのところだけは石川塾長の名前で、あなたはこんど役員になっておめでとうございますということから、今後塾生が続くのかな、というふうなことを言うてくる。うちの会社で新しく常務になった慶応を卒業している人にも、慶応三田会から祝電がくるのですね。そういう配慮というものが欠けているといえますか。それは十八万五千もあって、それを掌握するということは大変なことですよ。しかし慶応だっけかなりな卒業生がおると思いますので、慶応がどこでそういうことを掌握しているのか。やはりそういう一枚の手紙、一通の電報で絆ができるのじゃないかと思うのです。それには大学ではなかなか大変でしょうし、校友会組織が各府県にあるわけですから、そこが掌握するということも一つの方法でしょうし、またゼミとか、運動部とか文化部とかクラブなんかではいわゆる連帯意識というか、名簿もきちっとなっているのですね。中村さんもおっしゃっ

てたように、卒業生というのははがき一本出せばいいのですけども、住所変更しても言うてこないということで校友会としてはなかなか掌握できない。ゼミとか小さい団体では意外と掌握している部分もあるわけですね。

ですから、そういうものをなんとか学校当局でコントロールするかなにかして、卒業生もこれから上場会社なんかで役員にどんどんなっていくと思います。そういうところに学長、総長の名前で祝電を打っていただくとか、手紙を出していただくとかすることにやって盛り上げていくということですね。

それとやはり、なんといいますが、職域団体というのは意外としっかりしているわけですね。というのはサラリーマン社会ですから、上の役員が出てくるとなれば、下の卒業生まで全員そろおうというようなことですから、そういう職域団体を活性化してもらうことによって、校友会の組織化ということにながってくるのではないかと思いますね。

それといま慶応が帝国ホテルの地下クラブを持っているという話がありました、いま東京でもそういう話を持ち上がっているのです。なかなかこれが、やはりお金という間

題で表現しにくいのですけれども、同志社人のいちばん悪いところは、何かいうと、やろやろうといって簡単に集まるのですけれども、簡単に空中分解する。長く続けていくことがむづかしいですね。そのへんも同志社人の教育の欠陥というか、人のええところもあるのですけれども、もうひとつ信念がない点もあるのかなと思います。

浅香 時間もまいりましたのですが、実は最近ビッグ・ファイヴ・ブライヴェート・ユニヴァーシティといいますが、人によって意見が違うのですけれども、だいたい世間の評価では慶応・早稲田・上智・ICU・同志社という順番になってきている。それくらい世間の同志社に対する評価も高くなってきている。大学がよくなるためには大学と卒業生および父兄が一体となって努力することが大切だと思います。

その一つの方法として、先ほどおっしゃったように、名簿の整理すら十分にできていない。そのためにも大学か本部に、校友課ないしは校友部と申しますか、そういうものを組織して、ふだんから連絡を密にする。通信を出しても三分の一ぐらい郵便局から返ってくる

ようなことではどうにもなりませんから、基本的なことをまずやる。そして卒業生のうちに期待してもらえようにならばもういい、これが私のいまの気持ちなんですけれども。

六、卒業時一括加入

吉本 現実的には、大学や女子大を出たら校友会に入ってもらおうということですね。いまの異会長はそれを就任以来言っているし、私もずっと前から言っておるのですけれども、いまだに実現しない。卒業時終身会費二

万円の出さん。二万円の出してくれと、校友とのつながりがそこできるとはですね。そういうことの意味もいままにきていけるわけなんです。そこが学校あるいは学生と卒業生との間にほんとはやる気があるのかと思うところなんです。校友のほうは異会長一生懸命やっていますよ。よくあれだけ整備されたなと思うのだけれども、やはり入ってくるなければいけませんね。二万円払うことによって、おれは同志社の卒業生なんだという意識を持つ。この意識が大切だと思います。

浅香 同窓会の就職説明会のときには学生

はワットと来るわけです。そのときは他の学部生まで入ってくるわけですね。ところが終身会員になってくれということになってくると、自発的にはなかなか入ってくれないですね。

吉本 同志社とはいったい何か。卒業生と現役と学校の三つでできているのだという意識がないわけですね。ぼくは大阪人だから現実的な話をしている、そんな次元の高い話はしませんけども、実際にはそうしないと今の学生にはアピールしないということですね。

浅香 何かほかに、具体的にこういことをやればもっとコミュニケーションができるのじゃないかというような方法とか提案がございましたら承りたいのですが……。

吉本 ぼくはぜひ卒業のときに、みなが二万円出して校友になってほしい。それが一番の現実的な出発点やと思う。現実的です。

小西 それはほんとにいいことですね。というのは卒業して十年間ぐらいはなかなか会社の仕事が大変ですから、だじな時期でもありませんし、校友会活動というほうまでやる時間的な余裕がありませんね。それで三十

後半とか四十近くなってきた、ある程度時間的にも経済的にも余裕ができた。そのときにそういう活動をしように思ってたって、こんどは全然音信不通になっているというふうなこともあるのですね。ですからおっしゃるように卒業のときに二万円納めて終身会員になっておれば、「同志社タイムス」が月に一回ずつくるというふうなことでコミュニケーションは保てるわけですね。そしてそういうものが来ていれば、住所変更したときでもはがきの一本ぐらい書こうかという気持ちにもなると思います。それが遠ざかってしまっていて、その間に何回か転動している。いざというときにはどこへ行っているかわからんというよくな人がたくさんいるのじゃないかと思いません。

ぼくら東京で商売でいろいろと回っていて、意外と同志社だという人がおって、この十一月何日に帝国ホテルでこういうのがありますと言ったって、そんなの知らんと。東京の分室が銀座にあるのも知らんという人が多いのですね。

吉本 それは校友会に入っていないからですよ。卒業したときに入れてもらえる、また入

ろうという学生の意識が乏しいわけですね。

小西 学生は意識がないと思うのです。だから強制的に入れなければしょうがないのじゃないか。

浅香 大学も卒業時に終身会費を払い、自動的に入会するようにすればいいんですが。久保 中学の卒業生は全員校友会に入会することになっています。

吉本 それをやってもらわんと、いままで話したことが実にならんと思っているのですね。空論になる。

小西 だから強制的に入れて、「同志社タイムス」で絆をつなぐ。

中村 それをやりませんと学校とはまったく切れていくでしょう。たまにラグビーのテレビを見て、あ、同志社が勝ちよると、そのときに久しぶりに母校への思いを彼らはもつわけです。それは母校愛とは別のもので、母校愛の副産物なんですね。ほんとうの母校愛は突然、花火みたいに燃え上るものでなくて、しめった、たいまつみたいに火種を宿しながら永遠に燃え続けていくものです。卒業してコンタクトが切れないように、最初の接点をいまま皆さんがおっしゃったような形でつ

ないでいくということがだいじですね。

八、活動の活性化

浅香 なお最後になりましたが、わたくしがアメリカ留学中に経験したことを申し上げたく思います。アメリカでは卒業式のことを commencement といいます。commence という語は「開始する」という意味があります。「開始」という語がなぜ「卒業式」という意味に変わったのか、よくわかりませんが、実は大学のリユニオンと卒業式の式典が相前後して行われたことです。卒業は校友会への入会のはじまりであり、また新しい人生のはじまりであるかも知れません。リユニオンの式典にも卒業年代の古い順に、年代の記入されたプラカードをもって入場式が行われ、ついで学長や校友会長の挨拶があります。卒業生により大学への寄付金目録贈呈式でありました。卒業後、十年、二十年等の節目に卒業生が南はフロリダ州から北はヴァモント州まで募金キャンペーンを行い、その目録をリユニオンの日に学長に手渡すことです。校友はこの目録贈呈を通じて母校に対する感謝

と愛情を示し、大学の充実と発展に積極的に協力していることです。その式が終了してから改めて卒業式が行われたように記憶していません。この日は新しい卒業生と校友とで大学キャンパスは雑踏しましたが、大学の教師と新しい卒業生と校友が一体となる記念すべき日であります。わたくしは設備とかいろいろな面で問題はあると思いますが、同志社でも卒業式とリユニオンとが同時に開催され、母校に対する思い出を新たにするとともに、師弟相交りて楽しい一時を過ごすことも大切ではないかと思えます。

また各地における支部会活動と父兄会活動を一体化することも大切ではないかと思えます。大学は若干の学部にて父兄会があり、各地で父兄懇談会が開催され、学部長や学部の若干の教師がその地に出かけますが、各学部が個別的に行うよりも、その地で「同志社デパート」を設けてはいかがでしょうか。そのときは学長はじめ各学部長及び教務主任などが出席し、大々的に父兄懇談会を催し、大学と父兄との交わりを密にすることです。ついで校友会の支部会を開き、大学の近況を校友に報告することです。またそのとき大講演を開催

することも一つの案であるかも知れません。さらに可能なら支部総会の終了後、同志社グリー・クラブや同志社交響楽団の大演奏会を行い、同志社大学の学生生活の一端を見ていただくことも有意義ではないかと思えます。

いろいろまだお聞きすることもあると思えますけれども、時間もまいりましたので、きょうはほんとお忙しいところを貴重かつ率直な意見をちょうだいいたしまして……。

吉本 えらい率直すぎて申しわけない(笑)。非常に次元の低い初歩的な意見ですけども、そういう現実的な問題を進めていかないと学生と同志社と校友はいっしょにならないですよ。そのためには校友になってもらう。同志社卒業生即校友、同志社卒業生即同窓、十八万五千という数字は大きいけれども、中味が乏しく死んでしまっている。実際それだけ出たのかどうか知りませんが、その連中が一体になれるのは「同志社タイムス」だとか同窓会の通信ですね。同志社の大学がそういうところまで成長してほしいなと思います。そういう反省も含めまして、たいへん言いたいことを言いましたけども(笑)……。

浅香 いろいろ問題を提起していただき

ありがとうございました。一層の御協力をお願いいたします。

(一九八四年十二月二十一日収録、於有終館担当理事室)

同志社人としての
自覚を新たに

林

一

桜花爛漫四月ともなれば大学を巣立つ多くの若人達が社会の一員として新しく仲間入りをしてくる。

毎年毎年このパターンを繰り返しこれらの若人が母校を背に夫々の社会で実績を積み重ねながら新しい後輩を迎えてゆく。その人がつくりあげてゆく実績がその人の評価となり同時にその人の母校の評価に繋がってゆく。

大学をはじめ如何なる分野でも同様であるが企業にとつても夫々創業の精神と云うものがあり独自の経営理念と云うものがある。

その理念を一人一人が体し誇りを持ち企業の発展に努力していくことが社会への貢献に繋がってゆくとされている。

その根底は企業で学ぶ教育訓練の結果であるがそれを育む素養はその人の巣立った母校に於ける教育であると云われている。

然しながら最近の多くの後輩たちを見るに余りにも自らの母校の歴史や設立の目的等一番最初に学ぶべき、また知っておくべき重要な事柄を知らない。また自らを育ててくれた母校に対する感謝の気持ちも誇りもない人が多いのに驚いている。

間もなく卒業し社会人として巣立っていくであろう諸君にお願いしたいことは、今一度母校を振り返り、校祖新島襄先生の同志社設立当時に思いをいたし同志社人としての自覚を胸に将来に向つて羽ばたいてもらいたいと願う次第である。

吾が同志社は明治における教育の三大先覚者の一人と云われる校祖新島襄先生が一

八七五年歴史深い古都京都に設立し現在に至った訳であるが、この間百十年、浮田和民（同大・早大教授、早大の発展の基礎を築いた重要な一人）、海老名弾正（宗教家、

八代総長）、安部磯雄（同大・早大教授、社会大衆党々首、早大野球部生みの親）、片岡健吉（五代総長、立志社創立者）、徳富蘇峰（ジャーナリスト、国民新聞経営）、大西祝（哲学者、早大・京大教授）、徳富蘆花（小説家）、山川均（社会党生みの親）、深井英五（第十三代日銀総裁、貴族員議員）等々の先輩に始まり現在に至るまで宗教・政治、学問及び経済界を問わず幾多の国家に有益なる人材を生んできたわけであるが、これら同志社に学んだ同窓（現十七万人）を呼んで同志社人と云う。

この伝統ある同志社に縁あって入学し四余年余の歳月を共に学び、また後輩が先輩からその伝統を受け継ぎ今日まで一〇九年の歴史を築いた訳である。

既に御承知の通り校祖新島襄先生は海外での勉学に志を抱き、徳川幕府統治下で未開港であった日本より一念発起の上、脱藩の上国禁を犯し一八六四年に函館より出

国、上海を経て苦節十年米国で勉学の途についたわけである。

上海を出帆したのは同年七月九日である。大学構内の明德館に記念してその雄姿を刻んでいるワイルドローパー号に乗り、船員として働きながら大平洋、インド洋また大西洋の荒波を乗り越え一年かかってようやくボストンに一八六五年七月二〇日到着した次第である。

この船主は当時ボストンに居をかまえた大海運業者の MR. HON ALPHEUS HARDY (1816～1887年) であったが、船長の MR. HORACE S. TAYLOR より紹介されその援助を受けながらフィリップスアカデミー、アーモスト大学及びアンドーバール神学校を苦学して卒業した次第である。

この在米期間中の一八七二年岩倉具視ら特命全權大使一行が米国初訪問した時に一行の幹旋方と欧米の教育制度の調査を依頼され全權副使の木戸孝九、伊藤博文や文部理事官（文部大臣）の田中不二麿氏等の要請により田中理事官と共に米国及び欧州の教育視察を行い、調査報告書をまとめ、これが「理事功程」として刊行されたが、こ

れが明治学制改革の資料となった次第である。この様な経緯から日本政府に入ること強く乞われたにも拘らずキリスト教による学校設立を行い、国家に貢献せんことの熱意止みがたく一八七四年一月二六日十年ぶりに帰国し、東奔西走の末一八七五年一月二九日京都の現在地に同志社設立に当って下記の如き旨意により開校の運びとなったのである。

即ち同志社設立の目的とするところはただ普通の英学を教授するばかりでなく、その徳性を養い品性を高め、その精神を正しく且つ大ならしめるよう努め、また、ただ技術や才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するところの人物を送り出すことに努める……。それはただ神を信じ、真理を愛し隣人と和らぐところのキリスト教の道徳によらなければならぬことを信じ、それ故にキリスト教主義をもって徳育の基本としたのである……。

また我々は日本の高等教育において唯一の帝国大学（現、東京大学のこと）で当時は大学は東大よりなかったにのみすがって見るべきものでないかと考える。

思うに我が政府の手で設立された大学が役立つものであるということについては、何ら疑いを持つべきものではないが、人民の手で設立した大学が実に大きな感化を国民に及ぼすものであることをも信じて疑わない……。

大体教育というものは一国の青年を導いて一方に偏った型の中に入れ、偏った人間を作るような事があつたならば、それが実に一国に災いを及ぼす教育と云わなければならぬ……。

もとより資金の額またその完全な事からすれば私立は官立（現、東京大学のこと）に比較出来るものではないであろう。だがその学生は自己独自の氣質を發揮せしめ、自治自立の人民を養成するという点に於いては、これこそ私立大学の有する特性であり長所であると信じざるを得ない……。

一国を維持するには決して二人や三人の英雄の力で出来るものではない、それは実により一品性ある人民の力によらなければならぬ。これらの人民は一国の良心とも云うべき人々である……。

即ちこの一國の良心とも云うべき人々を養成したいと思つてゐるので、我々の目的とするところは実にこれなのである……。（以上設立の旨意より抜粋）等々に基いたものである。

また、特に知っておかなければならないことは同志社設立にあたって新島襄先生が明治七年日本に帰る直前、米國に於ける外国伝道教会第六五回年會が開かれたが、その時集まつた米國中の紳士淑女三千余人の中でお別れの挨拶の機會を得て日本での教育について涙ながらに話をした時、満場の紳士淑女より、その場で数千円（當時の金額）の義捐金を得、同志社設立に役立つたこと、また日本ではその設立にあたって、キリスト教主義に基づくと云うことから政府關係者をはじめ各業界のトップから一民間人に至るまで多くの人々に、先生他關係者が、非常に冷遇され、先生自身が語つていたごとく一時は実に憐れむべき境遇であつたさうである。然し内閣顧問木戸孝允、文部大臣田中不二麿、京都府知事植村正直氏他多くの人達の応援を得てようやく山本覚馬氏と共に同志社を結社出来る運びとな

つたのであるが、幾多の苦難に会い乍らこのように同志社發展の基礎を築いて来たこれ等のことをも、その歴史の過程として知つて置くべきであると思う。

大体以上が新島襄先生が米國に出発し同志社を設立するまでの過程であるが、特に強く考えさせられることはあの未開港、鎖國の日本から如何に理想をもち一念発起したとは云え、脱藩までして重罪をかえりみず、密出國して未知の國アメリカに渡つたそのパイオニア精神、その氣力と云う点にある。

この時の新島襄先生の冒険と云うか執念と云うか闘争心と呼ぶか意欲と呼ぶか知識吸収欲と云うのだろうかこの強い意志力があつたらばこそ達成出来た、ことである。この強い精神と幅広い見地に立つた判断力、またその信念、指導力があつたからこそ我が同志社が設立出来た次第である。

今ここで卒業していく諸君は大学を後にするにあつてその当時に思いをいたし、これをバックボーンとして社会人への道を踏み出してもらいたい。母校に誇りを持ち同志社精神に則り、社会への貢献とゆう観

点より積極的に前進してもらいたいものと思つてゐる。

最後に何を行うにも健康が第一である。どうか健康に留意され御活躍されることを祈つてゐる。

（昭和二年旧制大学経済学科卒業・松下電器貿易株式会社専務取締役）



異文化の中で

カニングハム・久子

当時、国際空港だった羽田空港を、ニューヨークへ向けて飛び立ったのは、一九六七年一月十五日夜であった。遠く輝いている星の中に、まるで惹きこまれるように昇りつめていく飛行機の窓から、東京の灯りがあっ気なく闇に沈んで行くのが見えた。それは苦しかった才月を母国に残し、太平洋の向こうに再起を求めた、記念すべき夜であった。

その時、私はもう三十三歳。留学生と呼ばれるには気恥づかしいような年齢に入っていた。

早いものであれから、もう十八年になる。同志社女子大学卒業後、就職した京都の観光バス会社で、事故のために左下腿を失う事件が無かったら、私はもつと違った人生を辿っていたであろう。

ニューヨークに於ける十八年は、「一瞬」の思いもするが、「体験」の意味から言えば、その数倍に匹敵する——と言う実感がある。

障害者として逃れるべくもない世界、その世界に重なる健常者の世界、そして異邦人としての自意識をあぶり出す異文化の世界が絡まった新しい環境は、日本で予期していた以上に厳しかった。(もう、引き返すことはできない!) という、何やら寂寥とした決意が、時には、励みというより、心の枷にも思えることがあった。そうした中で、曲りなりにも特殊教育(盲聾児教育)部門で、修士号を修めるといふ初志を全うできたのは、何よりもこの国の「相違」に対する「許容度」の高さを、依り所にでき

たからであろう。

世界中の人種のサンプルが混在している——と言われるニューヨークの街は、十八年前、既に対人関係に緊張感がみなぎっていて、しばしば、激しい口論や罵り合いが、到る所で展開されていた。

留学先のハンター大学はマンハッタンのアップ・タウンにあった。煤だらけの窓には雨足が幾条も跡を残していた。教室には飲みかけのコップや紙屑が散らばり、てんでばらばらの方向を向いた机は傷だらけ。

通学途中の地下鉄は何度も突然、停車し、何分たってもお詫びどころか、説明の車内放送もなかった。開かない扉もあって、慌てて開いている方へ——。間に合わなくて取り残されたり、次ぎの駅迄つれて行かれたり。約束を守る人も少く、泥棒が多いのも目についた。総ガラス張りの超モダンなビルの足許に、空襲の焼け跡のような廃居が広がって……。

ニューヨークの生活文化が、秩序だった日本のそれとは比べようもない混沌の極みにあったからこそ、この街には私ひとり

もぐりこめる隙間があったのだと、今にして思う。

仕事という穴ぐらや、結婚という穴ぐらにもぐりこんでみれば、その規模に従って更に見えてくるものがある。

当初、「許容度の高さ」と解釈できたアメリカ人の特質は、最近、違った様相を帯びて来たように思える。「許容」や「理解」は知と情を伴う人間の決断であるが故に、私のような異邦人の障害者にとっては、前途を照らす一条の光であった。

最近「許容」が「諦め」に、「理解」が「フラストレーション」に入れ変わりつつある。ニューヨーク市北の郊外にある、私の勤務先の研究所でも、頻々と盗難があり、トイレに行く僅かな時間にも、オフィスのドアに鍵をかける有様。この原稿を書いているクリスマス時期には、研究所のキャプテリヤの一隅を照らしていた、高さ三メートルのクリスマス・ツリーが飾りと盗まれて終わった。

所員の反応は「あ、又か」と言った程度である。それにしても、どうしてあんな大きな物をガードの目に触れずに運び出せ

たのだろう。同僚に言わせれば、こんなものは最早、犯罪の中に入らないという。

一方では、「フラストレーション」をより建設的に転換させているアメリカ人たちがいる。障害者の生活をできるだけ「普通」に近づけるために、ショッピング・センターに障害者用駐車スペース設置法が、実施されるようになってもう十年余り。マシントンには車椅子リフト付市バスが運行されている。十代の婚外妊娠者のために、自宅を解放している女性や、ホームレス（浮浪者）のために挺身しているグループ等、市井の中の力強さも未だ健在。

一歩外へ出れば、殺気立った人達との対応が待ち受けているニューヨークの街に住んでいる中に、いつしか、人間を様々な角度から眺める目が備わって来た、と思う。

そして、いわばその中間報告として、幸運にも拙著「そして挑戦の日々」を、昨年日本放送出版協会から出すことができた。偶然にも、健常者としての二十五年、障害者としての二十五年が、五分五分に出会った年に、拙稿が日の目を見たことになる。

この小著は、この国に於ける私のキャリア

ヤを通して見た、アメリカの一部を叙述しながら、実は、私自身のアメリカナイゼーションの一過程を省察する作業でもあった。

異文化ショックは、概ね次ぎの五位相に分けられると言う。

- (1) 解化期（魅了期）
- (2) 移行期（敵意期）
- (3) 学習期（適応期）
- (4) 受容期（二文化併立期）
- (5) 復帰ショック・再遍期。

私は十八年間で、やつと(3)から(5)を行きつ戻りつしているところだが、時には(2)まで退行することもある。

この生活環境をどう生かすがが、目下の最大心事である。二十五年前の事故、十八年前の渡米。そして又、もうひとつのターニング・ポイントを迎えた一九八四年を境いに、(さて、来たるべき数年の目標は：？)、と考えあぐねているところである。

(昭和三十三年女子大学英文学科卒業・一九六九年ニューヨーク、ハンター大学にて修士号(特殊教育)取得後、ニューヨーク医科大学教官を経て、現在ウエストチェスター郡立医療センター・精神運滞研究所、視覚障害者臨床サヴィイスプログラム主任。ニューヨーク在住)

自由と自主の精神

森 實

耐えに耐えて、同志社ラグビーは大学選手権で初の三連覇を飾った。ノーサイドの笛が鳴ったとき、昭和六十年一月六日の国立競技場は五万五千人の大喚声につつまれた。慶応の鋭い出足と気迫に押され放しのゲームであったが、この危機を救ったのは、監督なしでチームづくりをしてきた学生自らの判断であった。ポジションを代わり、ゴール前の猛攻を耐え、しのぎ、闘い

抜いた栄冠である。十五人の同志社の力に、長い伝統に培われた建学の精神「自由と自主」をみた思いがした。

「独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用する人物を出さん事」。新島襄先生が明治二十一年に発表された、キリスト教主義を根幹にすえた「同志社大学設立の旨意」は、その後一世紀、激動する時代の波にもまれながらも、今日まで同志社教育の精神的バックボーンとして貫かれてきたのである。そしてこの理念のもと、同志社は「自由と自主」を尊重する校風を確立したのである。創立者新島先生の卓抜した建学の精神であった。

新島先生の教育についての信念は「技芸才能ある人物」を育てると同時に、その才能を人間の良心に照らして運用する、行動力豊かな社会有為の人材を養成することにあつたと考えられる。ここに知識に片寄ることなく、知育・徳育・体育の調和した「人づくり」を目ざした同志社教育の特長があると思う。

同志社について想いをめぐらしている

と、三十数年前の在学中のことが、まさまざとよみがえってくる。なかでも、親しく教えをうけた故黒松教授についてふれておきたい。先生は経済政策、工業経済学の泰斗で、立派な学者、研究者であつたが、まさに人間の魅力にあふれた教育者そのもの、といった方がふさわしい感じであつた。学者としての厳しさ、真摯な姿、そして熱っぽく語られる人生論が数多くの年若い学生を魅了し、また慕われていた。先生が勉学に対する心構え、人生の指針として折りにふれて話され、揮毫もされた言葉は論語の

学而不思則罔
思而不学則殆

であつた。つねづね学問の大切さ、深く考えることの重要性を説かれて、門下生を諭されたものである。

このようにみえてくると、新島先生の「建学の旨意」や黒松先生の教えは、教育の荒唐が叫ばれている今日こそ、より新鮮な響きをもって訴えかけてくるのである。近年、入学試験の困難さが増してくるにつれ、私学の特徴が年々薄れていくような中

にあつて、同志社の人間尊重の教育の伝統はなお色あせてはいないと思う。自由と自主の精神はいまも力強く脈打っていると思つている。

卒業生、在校生ともこの校風を継承し、大きく育てて、多くの社会有為の人材が出て欲しいものである。その分野は極めて広く、多種、多様である。そこで、ここでは日本経済新聞社に身を置くものとして、日経はどんな人材を求めているかについて若干述べさせていだきたい。

日本経済新聞社は現在、四紙を発行している。日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞と英文日経である。いずれもわが国を代表するクォリティーペーパーで、このうち日本経済新聞は発行部数が二百十萬部を越え（六十年一月）、経済情報を中心とした全国紙として、国の内外から極めて高い評価を受けている。この高い評価は、

- ①常に時代の変化を先取りして、情報産業界の最先端を走り、各種情報事業の多角化を推進している。
- ②言論、報道機関として、最も大切な自主独立路線を貫き、常に中正公平な立場

から言論・報道活動や、各種の情報提供活動を展開している。

③学閥などいわゆる派閥が全くなく、全社員が公平、無私の立場で働ける実力の世界である。

という、伝統と社風から築きあげたものである。

それ故に、当然のことながら、この伝統と社風を次代へ継承する意欲と気概にあふれた人物、新聞人としての職責に生涯を賭けて悔いなしとする覇気に富んだ青年が望まれている。そこで採用の門戸も広く、あらゆる大学に開放し、^せぜひ我こそ、という実力派を求めているわけである。

一般に同志社の卒業生には、新聞人に必要な資質といえる清潔さ、平等観、あるいは自由と自主の校風にはぐくまれた在野精神がそなわつているといわれる。また経済の国際化が急速に進む中で、同志社教育の潮流にある国際的視野の養成、および語学力に期待するところ大なるものがある。

とはいつても、入社試験は慢然と門を叩いただけで、容易に開くというわけにはいかない。まず常識問題、語学、論文などの

テストを突破しなければ、面接まで進めない。したがつてこの一次試験をくぐり抜けない限り、どんなすぐれた資質を持っていても、採用者側に訴える方途はないわけで、すべては実力主義である。このため在学中の時間を大切にして、基礎学力、専門知識を充実させ「技芸才能」を磨くことが肝要と思われる。

大学の校門をはいったとき、ひっそりと佇む碑に刻まれた「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」という新島先生の言葉は、同志社に学んだ人々にとって非常に印象深いものである。ここに表わされる同志社精神に支えられた知識、思考力が、良識ある社会人として、あるいは新聞人として、行動力に満ち満ちた真の同志社人を世に送り出していくのではないだろうか。

目まぐるしく揺れ動く現代社会にあつて、同志社の百十年の伝統が生気を帯びてくるのを願っている。

（昭和二十五年大学経済学部卒業・日本経済新聞社常務取締役）

国立京都国際会館

一 最 康 代

大学の英文科を卒業して入社した大手企業の輸出部は、十年間同社で暖かく育てて頂いた者にとって、他流試合にも譬えられる外気であった。入社早々社内同同志社の先輩の方々に歓迎会を始め、親切に指導して頂いたことが今は懐かしい。競争社会の中で鍛えられた強さとそれぞれの個性、一杯の他大学の出身者の間で数年もまれ、仕事のABCを初め、コピーライティング

の初歩を教わり、次いでオーブン直後の国立京都国際会館へ幸運にも就職。

心を実践するべき仕事ではないかと最近痛感する。

まずは、開館早々の会議場施設の色々な案内印刷物の作成やユニークなガイドブック作成業務等を、卒業以来の多少の経験を土台に、新たなよい指導者・協力者を得て楽しく遂行。京都の国際会議場の十周年記念誌発行まで文書関係の仕事に従事、現在では国際会議のコーディネーターとして奮闘中である。国際会議と言っても、政治・経済・科学・医学・人文科学・芸術・宗教等専門分野によって国際会議があり、文字通り各界の世界的リーダーが一堂に集う機会である。日本の国際的な地位が各界で高く評価されたことによって、日本での開催の経緯となった一つ一つの国際会議であれば、その使命は大きい。私の仕事は、あくまでその会議の目的が成功裡に全うされ、支障なくプログラムが運ばれ、主催者にも一人一人の参加者にも喜んで頂くための舞台裏の土台の仕事である。すべての国際会議は成功して当然、決してやり直しが出来ない本番の連続である。同社社で繰り返した教わった「地の塩・世の光」という言葉の

国際会議には、それぞれの組織の会規で周期があるが、ある国で一つの国際会議が終われば、直ちに次回又は次々回の開催国では調査・準備が三年・四年・六年前から開始される。会議自体は政治・経済・學術等において、世界平和や人類の進歩・幸福を目指す高邁なものであっても、日本開催と決定されると、現実には、会場側としては、国内の都市間、ホテル・会議場施設間で誘致合戦も仕事のうちである。ある国際会議が、一旦京都の国際会議場で開催されると決定されれば、各界の国際的リーダーである主催者の方々を補佐させて頂いての、全体予算・スケジュール案作り、プレリミナリー・第一・第二のサーキュラーの印刷と配布、コンピュータを使つての参加者の情報整理、論文募集と審査のための準備、プログラム・座長・招待講演者選定等の補佐、登録料等の管理、参加者名簿作成、会期当日の会議運営と、大変忙しい。取得した国家試験のガイド資格も、かつての日の同時通訳の勉強も、直接的ではなく

ても、このコーディネーターの仕事に生かすことが出来ている。会議の規模は様々でも、その誕生から、本番の舞台で開花し結実する過程は、会議と言う生物である。パートナーはあっても、毎日が新しい課題との取り組みである。

七十カ国、八十カ国の海外の地より、世界の代表が、日本の代表も含め、数百人、一千人、二千人、時には四千人も五千人も、一所に会され、熱心に専門テーマを討議される会期中の数日間は、広い会議場も熱気を帯び、コンクリートの建物迄が興奮しているように思える。六カ国語の同時通訳設備をフルに使う国連関係の会議もあれば、英語のみが公用語の学会会議もある。オーディオ・ビジュアル機器も全体会議・分科会の内容に応じて正確に設置、机・椅子の数も予想出席者を概数予想して配置、更にこれらに先行して使用会場の確保と選定等、関係者の方々と共同の仕事で、何度も打ち合わせの会合をして、会議の幕あけともなる。

国際的に親善・親睦を深めるためには、歓迎レセプション・パンケット・フェアウ

エルパーティや茶会、また同伴の夫人や家族のための日本文化を紹介し、自ら楽しんでいただくための同伴者プログラム等も、国際会議には欠かせないものである。このような楽しい企画や手配も、主催者やエージェントの方々と一緒に進めてゆく。関連の展示会も、多くの企業の参加があつて、準備段階や搬出入等大変だが、賑やかであり、意義深い。

主催者の方々と言えば、会議場で仕事をさせて頂く身でなければ遭うこともないその道の偉い方々である。まさに「良心を手腕に運用し」、全力の真心で対応して行く以外に方法はない。会議場は、参加者も舞台裏の者も「和」の中に集い、友好の輪の出發の場でもある。準備期間の長い事務局代行時期は勿論、会期中は殊に、平常のスタッフでは物理的に運営が不可能であるので、アシスタントの形で大学生等に來て頂いているが、その中には沢山の同志社の後輩の方々に來て頂いている。

結果として、家庭を持ちつつ仕事を続け得た二十年余の年月の道程を振り返ると、その道は同志社と言う母校から出發してい

る道であつたことを、今改めて自覚する。微々たる力でありながら、今日社会の中で何かの仕事をさせていただけていることは、背後に同志社があつたからと、母校への感謝を深める昨今である。

(昭和三十四年文学部英文学科卒業・国立京都国際会館勤務)



私のなかの同志社

我喜屋 良一

同志社との最初の出合いから、かれこれ三十余年の歳月が流れた。私が文学部社会学科の二年次に繰り入れて頂いたのは昭和二十七年の四月のことであったが、この、いささか変則的な入学には次のような経緯があった。

当時、沖繩では米国民政府の肝いりで一種の育英制度が設けられ、これで選抜された青少年は「契約学生」と称する留学生の身分で専攻分野別に本土の各大学へ送られた。民政府が学費・生活費の面倒をみるかわりに、学生は卒業後、修得した専門の学

識を沖繩の復興に生かすべきことを旨とする契約が双方でとり交されたところから、この名が出たのである。私もこの制度のお陰で本土へ行けることになったのはよいとして、他分野の学生がすべて四年制大学へ割り当てられたのに反し、私を含めた数名の社会福祉専攻生だけが短大へ回された。

「社会福祉は沖繩の現況から従事者の短期養成が必要」との文部省の意向によるものであるが、如何にも釈然としないまま短大での一カ年が終る頃に、意を決して自分の希望する四年制大学への配置替えを直訴したところ、これが意外にすんなりとうけ入れられて同志社への二年次編入が実現したわけである。同志社に対しては、かねがね、エレガントでリベラルな大学とのイメージがあり、幼い頃から、いわば高嶺の花のような憧れを抱いていた。文部省の後押しがあったとはいえ、このような、一見、無謀な申し出を快く認めて頂いた同志社の、親心にも似た寛大さと自由闊達さに、私は改めて満腔の感謝と敬意の念を深めたものである。

しかし、この感謝と敬意のすぐあとに私

の胸をよぎったのは、戦中・戦後の沖繩の教育環境に育った身で、「果して付いて行けるだろうか」という不安と懸念であった。だが、これも案ずるより産むがやすしで、各科目とも単位を落とさずに進むことができ、それどころか、四年生の折には、学業成績優秀なる故をもって、同志社特別奨学規程による賞状と奨学金を大塚節治総長、大下角一学長のお名前で頂戴した次第である。これは自分でも夢想だにできなかった出来事(?)で、偏に、御指導、御鞭撻を頂いた諸先生のお力添えの賜物に外ならない。社会福祉学の竹中勝男、嶋田啓一郎、小倉襄二、ドロシー・デッソー、社会学の伊藤規矩治、青井厚、新聞学の和田洋一、社会政策学の中條毅の、社会学科専属の諸先生の芳名を代表的にお挙げて、謝意の表明に代えさせて頂きたいと思う。

友人として現在まで知己の付き合いをさせて頂いている方々も少なくないが、紙幅の都合もあり、元総長住谷悦二先生の令息で、現在、社会学科で教鞭をとって居られる磐教授のお名前を御紹介するにとどめることをお許し願いたい。

前述の経緯から、同期の契約学生が四年の学部課程を卒業して帰沖したなかで、私は特に願ひ出て、引き続き同志社の大学院で社会福祉を勉強することになった。その頃には既に契約学生の制度はうち切られており、これは新設の琉球政府直轄の琉球育英会の計らいによるものであった。時あたかも県出身の大浜信泉先生が早稲田大学の総長に就任された慶事を記念して大浜奨学生制度が創設され、幸いにしてその知遇を得ることができたことに加えて、日本育英会からも奨学金貸与の便宜が供されたため、二カ年で修士課程を修了し、昭和三十二年四月に、創立七カ年目の琉球大学へ赴任することになった次第である。

琉大には翌三十三年に社会学科が創設されたが、その研究分野は当時の同志社を範に仰いで、社会学プロパー、社会福祉、マス・コミの三専攻で発足することになった。復帰後、国立移行に伴い、機構は学科目制に変わったが、その基調は従来の三分野に社会人類学を新たに加えたものである。

昭和三十九年には東京オリエンピックが催されたが、この年、本土長期研修の希望が

叶えられ、久方ぶりに母校を訪れて再び前記諸先生の薫陶をお受けすることができた。まことに有難いことである。

四十年九月、上野直蔵学長、中桐大有教務部長の御訪沖があり、その際、両先生に同志社大学推薦入学に関し、沖縄の高等学校教育の実情をつぶさに御視察頂いて深い御理解を賜ったことが大きな機縁となつて、この頃から現地の高校生と父母の、同志社への関心と熱意が頓に高まった。三十年代には僅かに数名に過ぎなかつた校友も、昭和六十年の現在では百三十余名の多きを数えるに至っている。

去年はまた、日本社会事業学校連盟の賛助会員として、大韓民国での第五回東北アジア社会福祉教育セミナーへ出席する機会に恵まれた。先年、私同様に同志社大学の長期研修で御高配頂いた同僚の川添助教も同伴の旅であった。連盟の事務局が同志社におかれていることも幸いして、会長の大塚達雄先生をはじめ、井垣章二、岡本民夫、黒木保博の諸先生に親身のお世話を頂くことができた。ここに改めてお礼を申し上げます。セミナー開催地のソウルで

は、私共も先生方の御好意で、校友の金徳俊先生（韓国基督教社会福祉学芸長）ほか、同志社とゆかりの深い皆様方との懇親の集いにお招き頂いたことも、忘れ難い思い出となつた。

昨年十一月に、校友会沖縄県支部の定期総会が催された折には、わざわざ、本部から異悟朗会長、西田喬彦事務局長、大学からは木枝燦学長の代行で橋本静信工學部長が御来臨下さつて丁重な御挨拶と大学の近況御報告を頂くことができた。橋本学部長は特に上野総長の御逝去にふれられ、つい最近まで先生が沖縄再訪問の御気持を強く示して居られたことをお話し下さつた。今はただ、先生の御冥福を心からお祈り申し上げるばかりである。

来し方を顧みて、私は常に同志社の庇護を頂くかたちでのみ、母校と関わつてきたことを痛感する。いずれの日にか、私のなかの同志社に自らの一臂を捧げるときのあのらんことを心ひそかに念じて筆を擱きたい。

（昭和三十年大学文学部社会学科卒業・琉球大学教授）

女子大の卒業生として

日 比 恵 子

同志社創立以来百有余年という流れの中では、学部を卒業して十五年という年月も、ほんの一点にしかすぎない。今回、私のような若輩が、「母校と卒業生」というテーマで何かを書くようにとの依頼を受けて、まさしく同志社大学に対する同志社女子大学という母校を意識したのである。この機会に、母校を客観的に見て分析してみようと思気込んでみたものの、如何せん

未熟な私の手に余る仕事であった。英文科という、同女の一部でしか接触がないし、まだまだ母校に甘えている部分が多すぎる。結局、私の中途半端な問題意識を、自分自身に関わる部分だけ未整理のまま曝け出す、という形で母校を振り返らざるを得なかった。

母校とは、遠くに在って想うものである。私は現在、京都に住んでおり、時々、女子大の図書館を利用して頂いているので、物理的には母校から完全に遠ざかってしまったわけではないが、それでも母校を離れて、同志社とは直接関わりのない場所です仕事をしていると、母校の存在を必要以上に意識するものである。いや、意識させられるのかも知れない。それは、職業柄、出身大学を問われる時、そして付随的に女子大の存在意義（同一学園内に大学が二つあることの意義、その必然性）を問われる時、個人的な回顧により、ふと学生時代を思い出す時などであろうか。卒業して年月が流れる程に、母校の伝統の重みは増してくるように思われる。母校を背負ってなどと気負う程若くはないが、良きにつ

け、悪しきにつけ、「同女の卒業生は」という言葉で私自身に返ってくる時、やはり卒業生としての責任を自覚せざるを得ない。

同志社大学の名が全国的に聞こえている程には、同志社女子大学の存在は知られていないようである。近年、学生の質的レベルも向上し、入試でも難関校という巷間の風評ではあるが、全国的な知名度となると、少し弱いように思える。時々、出身大学を聞かれることがある。そんな時、「同志社女子大学」を二度繰り返すことが多い。最初は、必ずといっていいほど、同志社大学と間違えられるからである。それだけ、同女の卒業生が外に出ていないということである。うし、実績不足という事実も否めない。短大の教員という立場でこの質問を受けると、自分の身の程知らずを指摘されているようで、複雑な気持ちになってくる。しかし、オール同志社という観点から、「同志社」という冠を錦の御旗にして、同志社を出ています、などという曖昧な表現は使いたくない。私は同志社女子大学の卒業生である。それ故、母校には、共学と

は違った女子大独自の特色を打ち出して
 いて欲しいと願うものである。

同志社英学校が開校された翌年には、早
 くも女子教育が開始され、三年後には、女
 学校が正式に開校し、その後女専へと引き
 継がれている。学制が変わるまで実に七十
 余年。新制大学としての歴史は、まだその
 半分にしかなっていない。大学院に至つて
 は、更にその半分である。現在の同女が、
 如何に女学校以来の伝統に負う所が大き
 いかを考える時、同志社の中から女子大が消
 えることはあり得ないであろう。しかし、
 女子教育という言葉の持つ意味は、時代の
 推移と共に大きく変わってきているはずで
 ある。少なくとも、女子に学問は必要なし
 と考えられていた開学当時の意味ではな
 い。従つて、女子教育の意味を時代に即し
 て再考し、女子大として出来る事、女子大
 の卒業生として出来る事を問い続けていく
 ことが、女子大の存在意義の確認にもなり
 得るのではないだろうか。勿論そこでは、
 同志社大学とは兄妹の關係にあると言われ
 るように、両大学の個性を踏まえた上で
 の、同一学園内にあるからこそという利点

は、十分に考慮されるべきであろう。

現在同志社では、二十年來の懸案であつ
 た田辺校地への移転問題が、六十一年度の
 開校を目指して実現の方向に進んでいると
 聞く。又、田辺の学研都市計画も、同志社
 を中心にした地域の町づくりや周辺地域整
 備の方向で示されているようである。女子
 大關係では、学科増設、短大新設など、移
 転を機に、新たな構想が持たれている。そ
 して、その根底では、国際化ということが
 強く意識されているように思える。來たる
 二十一世紀を担う、国際社会に通用する人
 材が新たな構想の中で育ち果立つて欲しい
 ものである。依然として男性中心の社会で
 は、女性の受け入れも広いとは言えない
 が、私達卒業生の方にも飛び立つ覚悟は必
 要である。概して、同女の卒業生は真面目
 である。しかし、女子大ゆえの特殊性、閉
 鎖性の中で小さくまとまつてしまつて、外
 に出ることに對して心理的不安を覚えてい
 るのも事実である。当面の問題は、この不
 安を乗り越えることであろうか。同女の卒
 業生の社会的評価は、今後、二十年、三十
 年とかけて、卒業生自らが定着させていく

べきものである。

母校は、まさしく温床そのものであつ
 た。女子のみの中では、男子学生と鑄を削
 り合うという厳しさを経験することもな
 く、世間知らずのままに、比較的のんびり
 と学生生活を送つた私にとって、その居心
 地の良さ故に母校はいつでも安心して帰る
 ことができる場所である。そして、他の女
 子大ではなく、同志社女子大学であつたと
 いうことを意識させるものは、私の全く乏
 しい学生生活の経験の中で出会つた「寒
 梅」と「良心」という言葉である。新島先
 生が漢詩に詠まれた寒梅のイメージ。同志
 社を象徴する「良心碑」の言葉。学生時
 代、強烈に脳裏に焼き付いたこれらの語句
 が、今は自戒の意味を込めて私自身に返つ
 て来る。既に後戻りは出来ない今、同志社
 女子大学の卒業生であるということを忘れ
 ずに歩くのみである。

(昭和四十五年女子大学学芸学部英文学科卒業・
 昭和五十一年女子大学院文学研究科英文学専
 攻修了・京都短期大学助教)

涙する新島の感性を

岩井健作

新島襄が学生を想い、学生一人一人を大切にする教育者であったことは周知のことである。創立一〇周年記念式典の演説は殊さらにそのことを覚えさせる。そこには彼の外遊中に放逐された七人の学生たちを思う言葉がある。「真ニ彼等ノ為メニ涙ヲ流サマルヲ得ズ。彼等ハ或ハ真道ヲ聞キ、真ノ学問ヲナセシ人々ナレトモ、遂ニ放逐セララルノ事ヲナシタリ。諸君ヨ、人一人ハ

大切ナリ。一人ハ大切ナリ。往事ハ已ニ去レリ。之ヲ如何トモスルコト能ハズ。以后ハ我儕実ニ謹ム可シ」(同志社百年史通史編一、五九頁)。卒業しなかつた学生への愛しさがこれ程であるなら、まして卒業生においておや、である。新島の思想の根底にはキリスト教がある。それは神の前での自由、自主、自治の人格の尊嚴の思想であり、それを現実的ならしめるキリストの十字架の愛への信仰であり、ピュリタニズムである。その現われが学生への愛であった。そこには学生と教師、あるいは学ぶことと教えることの主客の關係の明確な区別と順序の認識があつた。かの「新島校長自責事件」の真意もそこにあつた。教えるという教師のわざや努力の限界を越えて教育が成立する根拠を「成長させて下さるのは神である」(新約聖書、コリント第一、三・六)という終末論的信仰に置くからこそ、学ぶ者の心が、教える者のわざに優位せざるを得ないのである。新島が放逐せられた者のために涙を流したという、その感性に驚かざるを得ない。

×

私は現在、同志社と關係の深いプロテスタント教会(日本基督教団神戸教会)の牧師の務めを負っている。この教会の創立は同志社より一年早い一八七四年(明治七年)である。その古い歴史を学んで一つのこと気がついた。恐らく日本の近代史に於ては他の分野においても同じ傾向があるのではないかと思われるが、明治二〇年代までの歩みが実に躍動的であるということだ。伝道の面においては、三田、兵庫、神戸多聞、明石、西宮の諸教会が次々と独立し、中国・四国地方へと活動が伸びている。文明開化の担い手として、出版では「七一雜報」の創刊、教育では「神戸ホーム(現神戸女学院の前身)や頌栄幼稚園及保母伝習所、産業では北海道開拓会社赤心社、社会面では神戸孤兒院やYMCA等の創設がこの教会に関わる人々の手で行われている。そのめざましい活動は、新しい外来の文化や精神から学ぶことの旺盛さと呼応している。それは「和魂洋才」といって外来の技術の修得ではなく、現状を批判し自己変革をもたらす精神の受容から来る躍動である。ところが、その後の教会の歴

史には、初期の発展の「栄光」に比べるならば、それほどめざましきは感じられない。既に獲得したものを守り継承し、教え伝えていくこと自身の性質にもよるのであろう。或いは日本の近代史全体が、「和魂」の固定的継承、それ故の權威主義（天皇制精神構造の拡大強化）体制優位に傾く中で、教会もまた自由ではあり得なかつたことの現われであるとも思える。

このことから思うに、受け継いだものを守り教えることが、自由に学ぶことに先行する時、教育も宗教も躍動的生命力が弱められざるを得ない。

×

最近手にした二冊の本から同じようなことを感じた。「これからどうなる 日本・世界・二一世紀」(岩波書店編集部編 一九八三年)には、現在日本の各界第一線で活躍している四四六名の人たちの見解が記されている。二一世紀への展望と見通しであるが、概して論調は明るくないし、射程が短かい。今花形の情報化社会への論述にしたところで、今の均質情報個人が個人の熟練度に応じた情報化へとすすみ、それは同時に

個人環境の支配へとつながると暗い。「笑顔のファッショジム」への不安がちらついている。まして教育や社会福祉関係者の論述の中には悲観的でさえあるものがある。オイルショックの後遺症の深さを知らされる思いである。ところがこの本のと、同じ編集部によって編集された「WOMENESI 女たちは二一世紀を」(一九八四年)という本がある。これは先の本と対照的に明るい。三五一名の女たちの論述には、みずからの手で未来を作らんとするアクティブな生と痛烈な文明批評とが語られている。巻頭の言葉がよい。エリート大学からエリート会社へと強いようではあるけれども、いったんその中で自己主張をしようとしたらどうなるか。それは強者が世界を爆滅できる武器をもっている社会となる。現代の主題とは、そういう中でどうやって弱者が生きていくかということであるという。そしてこう結ばれている。「女の知恵は、弱者の知恵であり、それはまた、原始社会で自然の圧力と野獣の牙からのがれて生きのびた人間の知恵でもあるのだ。私たちは地球を代表して、人間社会全体として、もうい

ちどそういう知恵に目覚めなければならぬところなきにきていると思つ。どうぞ、女から習ってください。」(オノ・ヨーコ)この最後の言葉がふるっている。そこに私はこの本の明るさのもとを見たような気がした。差別や抑圧を経験してきた者の側には、支配や権力への抗議という怒り以上に、弱者が逆説的に全体を包んでいくやさしさと智慧がある。その智慧を学び習うことから見えてくる展望は大きい。習い学ぶことは失敗や錯誤や挫折があるにせよ希望がある。習い学ぶことを優位とする感性のあるところに、また新島の子等も生きている、と信じる。母校の現在に、そのような感性はあるのだろうか。卒業生であることとは「一人一人ハ大切ナリ」と涙する新島の感性を宿すことと自戒しつつ歩みたい。

(昭和三十一年大学神学部卒業・昭和三十三年大学院神学研究科専攻・日本基督教団 神戸教会牧師)

望むこと

茂 益 代

天が下のすべてのことには季節があり、
すべてのわざには時がある。

生るるに時があり、死ぬるに時があり、
植えるに時があり、植えたものを抜くに時
があり、

殺すに時があり、いやすに時があり、
こわすに時があり、建てるに時があり、
泣くに時があり、笑うに時があり

……わたしは神が人の子らに与えては

ねおらせられる仕事を見た。神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを始めから終りまで見きわめることはできない。(伝道の書三・一〜十二)

田辺学舎の起工式が行われた旨の一月九日付新聞記事を総長によるクワ入れの写真と共に読んだ。「移転構想を発表してから二〇年ぶりの建設着手」との記事を読み、もうそんなにも思うと同時に右の聖書の句が頭に浮んだ。人間には「神の時」を見ぬく叡智は与えられていないが、それを思う心が授けられている。「植えるに時があり、建るに時がある。」同志社は一〇年いやそれまでの準備期間を入れればもっと長く、この「神の時」にささえられその営みを続けていくのだとの感慨と共に、敬虔な思いにかられる。銘柄酒ならぬ銘柄大学に発展した今、同志社は新しい地で新しい皮袋に入ってどんな発酵をしてゆくのだろうか。

で学んでいた父は母校の思い出と共によく口にする)をも乗り切りその歩みを続けた。どんな強靱なものでも押しつぶせる時代という波にも逆らえる、保津川下りの船頭の竿のようなものを同志社は決して手放すべきではない。時代時代の要求から精神的に完全に自由であり続けてほしい。田辺移転が物的拡大に終ることなく、内なる物的欲求からも自由な同志社であり続けてほしい。

人はそれぞれ内に思い出箱を抱え生きている。道すがらその思い出箱を開き、何かを確かめたり、又新たに加えたりしながらその人となりを形成してゆく。思えば女子大学に入学し、まずオリエンテーションとして受けたのが新島襄と同志社のこと、そしてカレッジソングの練習であった。数日後ぞろぞろ連れだつて遺品庫見学をした。それが私の学生生活を方向づけた。同志社の立つところに学生を立たせ同志社の精神の出発点から彼らの歩みを開始させる。強引に見えるが、その事を抜きには真の同志社は存在しなくなりはいまいか。「庭上の一寒梅」「真理は寒梅のごとし」の二句を

式辞に「春の調への鶯よ、花の夢路を解くなかれ……」の歌声を背に卒業し一五年以上になる。その間子育てをし、働き、地域と交わり、日常の営みに明け暮れていると、母校との直接的なつながりは一見遠のいてゆく様に見える。

平均寿命八〇歳強といふかなり長い人生の中で各人が同志社で教育を受ける期間ほんの一時期にすぎない。そこで学校が出来る事は各人の心に真理へ向かおうとする「種」を蒔く事、酵母を植えつける事につきはしないか。種はやがて成長し実を結ぶ。酵母は発酵し、芳醇な酒となつてゆく。母校で得たものは形を変えはすれ、各人の中に生きて働き、芳醇な香りを社会に放つ。

同志社が二〇〇年を迎える時はより広々とした宇宙空間への移転問題が現実にとつてくるかもしれないと思わせる程、科学の進歩はめざましい。もはや人間は後戻りが出来ず先へ先へと進むしかないのである。情報、知識の量には手にあまる程増え続けるだろう。多くの学校や学生が目差すのは、とにかく出来るだけ多くのしかも即効性のある知識を与えよう、獲得しようであ

る。人間作りを最重要に置く努力をおしまない学校が日本の中に何校あるだろうか。

人間性を回復し、科学と平和共存し、総てを知り、支配したいとする理性の持つ誘惑を退ける事の出来る謙虚な人間を育てる事、それが同志社に期待される教育ではないだろうか。世間的な表現を借りれば、いわゆる程度の高い質の良いといわれる学生が集まるなら集まる程、なむさら、今までも増して、知を操る人間側の教育を行う義務を学校は負うべきだろう。

昨年は二度同志社に里帰りし旧交を温める機会に恵まれた。その時にスナップ写真を撮ってくれた友人から写真と共に「できた写真を見て写っているのはやっぱり四〇を越えた私たちでしたが、不思議なくらい若返っているように思いませんか」と書いた手紙を受け取った。その友人や私の思い出箱の同志社は単に昔をなつかしがるものではなく今を生かし、若返らせ、永遠の一部に連なろうとするエッセンスである。又、そうあり続けてほしいと切望する。

原稿の依頼は母校に望む事を出来るだけ具体的にということを始めは地域と同志社

の事、音楽、インスティテュート、語学センター、カルチャーセンターの事、結婚や同志社ファミリーの事（主人と私は七人からなる同志社ファミリーの一員で、三代目、四代目と続く事を秘かに願っている）、その他もろもろを具体的に書くつもりで筆を進めていたが、原稿を書くかたわら読んでいた本のあとがきでスタンフォード大学礼拝堂の壁に刻まれているとの言葉に出合い、無くて無らぬもの一つだけをあえて書く事にした。編集部の意図にそわなかつたかもしれないがお許し願いたい。

「霊的な事柄について人間の視野が狭まるほど致命的なことはない。地上を歩む人間を襲う悪のうち天国を見失うほどひどい悪はない。しかも、文明にはその悪を妨げる力はない。償う力もないのだ。人類の中心の最高真理を把握する力が弱まったら、科学の領域がどんなに拡大されようとも、いかなる理論的真理を獲得しようとも、もはやあがなうことは不可能である。「その生命の代に何を与へんや」と（清水汎訳）

（昭和四十年女子大学学芸学部英文学科卒業・昭和四十六年女子大学大学院文学研究科英文学専攻・関西大学帝塚山大学非常勤講師）

女子学生諸姉へ

笠井翠

今出川の校門を入るとあの懐かしいレンガ造りの建物と颯爽とした学生諸氏の——とりわけ女子学生らの華やいだ姿——が目についた。

私も女子中、高そして大学を通じて十年間の学生生活を、同志社で、のびやかな自由な校風の中で送らせてもらえた。そしてそれは、このうえもなく大変幸せだったと心から——外交辞令ではなく——感謝して

いる。

けれども、今くったくなく、のびのびと、おおらかに過ごしている女子学生諸姉を見ると、いいなあという羨望とノスタルジアを感じると同時に、一抹の不安も心をよぎる。

我国では、男女は大学時代までは殆どと違ってよい程平等に扱われている。

しかし、一歩社会に出ると、遺憾ながら、そうではない。企業に就職しようにも女性には僅かしか門戸が開放されておらず、たとえ入社出来たとしても、いろいろの分野で、異なる扱いが当然のように待ち構えているようだ。たまたに女性が課長にでもなればマスコミが騒いだり、男女ほぼ同数で構成されている社会を見ている新聞記者諸氏中でも、女性記者はそのうちの僅か一パーセント程しか占めていないという話を聞いたたりすると、女性の社会進出もまだまだということを見せつけられる思いがする。世間はまだ「男性中心社会」の残渣から脱しているとは到底いえない。

この華やいだ有能な女子学生達はそういう

現実を十分認識し、それに対する自分の考えをあたためたり、時にはそれに対する対応を考えながらあふれんばかりの才能と豊かな時間に恵まれた貴重な学生時代を過ごしているのだろうか。

同志社出身の女性は、物心共に恵まれ、垢抜けした都会的センスと程よい知性を備えて魅力的であると一般によくいわれている。このことは、結婚市場で同志社出身ということが一つの有利なパスポートになっていることから肯ける。我が同志社は女性にとって誰がなんといおうと、理想の学舎であろう。

しかしながら、二十一世紀の女性像にも思いをいたすと、我校は、いわゆる魅力ある良妻賢母型女性像とそれに伴う高い評価に、学生、学校とも満足しすぎてはいないだろうか。これからの女性はますます多様化する社会や平均寿命八十歳代の長寿に伴う、いわゆる第三サイクル時代に順応できることがいやでも要求される。今でも、子育て後の人生設計に関心が高いが、その時になつて、諸姉は趣味あるいはパートで心の底から納得できるだろうか。

のんびりと自覚もなく平凡な学生時代を送った後で、急に社会に出て仕事をすることになった私自身を振り返るときに、このとが一番気に懸ることである。私事で恐縮だが、私の例でいえば、結婚し子供も出来てから司法試験を受けたために夫や子供に多くの負担をかけた。合格までの三年程はゴールデンウィークといっても家族連れで出かけることなんか出来ない相談だったし、そんな表面的なことだけではなく、夫や幼い子供の上にも試験という重苦しい影を乗せていた。一人だけの責任と負担で済んだ学生時代に、何故もつと将来のことを考え、思い切った努力をしなかったのかと、今でも、自分自身、はがゆい思いをしている。

学生諸姉におかれては、これらの点に、そこはかとなしい思いを馳せるだけでなく、家庭や子供のハンディもなく、時間と才能をフルに活用できる今この学生時代にこそ、やがて社会で鍛えられる時のくる男子学生諸兄に一步先んじて、基礎的な力を身につける努力をすべきではないだろうか。現在社会の各方面で活躍しておられる他

大学出身の女性達にも、職業柄お会いすることが多いが、我母校の女子学生諸姉は、それらの女性達に比べ少しも遜色ない——いやかえってその上に女性らしさまで身につけておられる——と常々思っている。

そのような同志社女子学生の皆様方の御精進と御活躍を祈つてやみません。

(昭和三十九年大学法学部法律学科卒業・弁護士)

D・W・ラーネッド『回想録』刊行について

D・W・ラーネッド先生は、アメリカン・ボードの教育宣教師として来日、新島先生、J・D・デビス先生と共に、開校直後から半世紀以上も同志社の教育に貢献されました。その間、同志社大学の初代学長を兼務され、神学・経済学・政治学等の学界にも顕著な業績をのこされました。

先生のご永眠四十周年(昭和五八年)にあたり、遺徳をしのぶ事業として、先生が同志社を引退されて帰国される時、当時の『同志社新聞』に寄せられた「回想録」等を復刻しました。

回想録 D・W・ラーネッド
ラーネッド先生の「回想録」によせて

同志社創立回顧
予が七十年の生涯

ラルネデ回想録
三つの自由を………訳・大塚節治

訣別の辞
編注・解説

ラーネッド先生略年譜

発行者・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
頒 価・三〇〇円